

## 随 筆

### にわか山伏修行

下 道國

ある会合で、以前から知り合いのSK氏から「大峰山に登りませんか」と誘われた。SK氏は元大阪経済産業局の公務員で、京都入峰会に属して修験道を極めている人物で、法螺はもちろんであるが、余興などではトランペットを吹くなど多芸な方である。

大峰山は、ご存知のとおり、紀伊半島の中心部に位置する大天井ヶ岳（1439m）、山上ヶ岳（1719m）、大普賢岳（1780m）、行者還岳（1546m）、稲村ヶ岳（1726m）、弥山（1895m）、最高峰の八経ヶ岳（1915m）、釈迦ヶ岳（1800m）、涅槃岳（1376m）など、吉野から熊野にかけての1000～2000mの山系をさすが、単に山上ヶ岳だけを云うこともある。山上ヶ岳は、7世紀後半に役小角（えんのおずね）が修験山伏の山と開いて以来、1300年間「おとこ」が修行する山として存在し、山頂には真言宗大本山の大峯山龍泉寺がある。ここはまた、吉野から熊野に至る「大峰奥駆け」として世界遺産に登録されていて、登山者や熊野詣をする人から愛されている山々でもある。

山登りを趣味としている私は、関西の山、特に吉野の山々はかねがね関心を持っていたが、岐阜県に住んでいることから、なかなか登山の機会がなかった。同じ会合に出ていた山好きの数名の方々と話しているうちに、「行こう」という気持ちがふつつつと湧いてきた。

平成29年5月27日（土）の朝8時ごろ、前泊したホテルを後に、近鉄阿部野橋駅から檀原神宮前駅に向かい、9時50分ごろ山伏姿のSK氏および今回初めて参加する4名（うち女性2名）の方々と落ち合っただけなく、京都入峰会の面々と合流した。事前に案内をいただいていたので、この一行が大峯山入峰修行であることはわかっていたが、この時初めて面々の山伏姿を見て、改めて修験道に参加するんだと実感した。正会員15名と、京都から初めて参加した1名と我々5名と併せた新人（随喜会員）6名、総勢21名がチャーターしたマイクロバスで、一路ミタライ溪谷に向かった。

ミタライ（御手洗）溪谷は、天川村にある吉野でも著名な溪谷ということで、



山上ヶ岳から、右前：稲村ヶ岳、中：弥山、八経ヶ岳、左奥：釈迦ヶ岳



山頂の大峯山龍泉寺の名札

この日も多くの観光客が来ていた。ここから観音峰登山口までの1時間ほどのハイキングコースを歩いたのち、再びチャーターバスに乗り、洞川（どろがわ）龍泉寺の奥村旅館に着いた。

奥村旅館で、朝コンビニで買った昼弁当を食べた後、参加者紹介・オリエンテーションがあり、護摩修行の注意などを聞いた。この時、護身法と云い、両手の掌を併せた状態の蓮華合掌から被甲護身の形にする手の所作を教わったが、いまだによくできない。その後、駆入柴燈護摩嚴修と神証殿の法楽に参加し、教本を見ながら般若心経と他の経を唱えることとなった。

入浴後、17時30分からの精進料理の夕食を済ませ、18時30分には早々と就寝となったが、修行中ということで酒は飲んでいないのに、不思議とすぐに眠りにつくことができた。

真夜中の1時30分に起床して、水行に参加した。5月末とはいえ、吉野の山800メートルの夜中の気温は数度まで下がり、我々新参者は足だけでよいと言われたが、1分も入っていられなかった。

宿に戻り、「いよいよ登山だ」と思うと眠気はどこかに行ってしまう、防寒具、ライト、朝食用の握り飯など用具を整え、2時20分頃に宿の車で山上ヶ岳登山口に向かった。登山口の駐車スペースは広く、それに続く遥拝所には多くの石碑が建てられており、まずそこで法楽をした。次いで、その中の京都入峰会の石碑前で参拝し、女人結界（禁制の意）と書かれた大きな看板を横目で見ながら登山が始まった。なお、女性グループはこの山には入れないので、彼女たちは宿から別行動となり、女性の修行者が登るといふ稲村ヶ岳に向かった。

真夜中のこと故、ヘッドライトや懐中電灯で足元を照らしながらの登山となった。最近のライトは、LEDで安価で電池の消耗は小さいくせに大変明るく（60ルーメン）、妙なところでノーベル賞に感心した。登山中は、「懸け念仏」

を唱えた。これは、頭（班長）が「慙愧懺悔（ざんきさんげ）」と唱えると、続いて全員が「六根清浄（ろっこんしょうじょう）」と唱え、これを繰り返しながら歩くのである。昔、御嶽山に登った折、「六根清浄」と唱えながら登山する信者一行を見て、何やら妙な感じを持ったものだが、今、そうしている自分が普通に思えた。「六根」とは、眼（げん：見る）、耳（に：聞く）、鼻（び：嗅ぐ）、舌（ぜつ：味わう）、身（しん：触れる）、意（い：知る）、つまり迷い多い五感に惑わされず、かつ心に積もる煩惱の雑塵を払拭して清浄無垢となり、真実を正見するために唱えるのだと教わった。

途中、旧一の瀬茶屋、一本松茶屋、お助け水等で小休憩を取りながら登るうち、4時過ぎには夜が白み始め、4時45分ごろに雲の切れ目に日の出を見ることができた。5時前に洞辻茶屋で法樂をし、5時10分ごろ松谷茶屋に着いた。天気予報は「晴」であったが、山のせいかわ霧が出ていて風も吹き、気温も下がってヤッケが必要であった。

足元を照らすライトも不要となり、いよいよ山頂近くに来たなと思ったとき、右前方に絶壁の高さが100メートル近くはあろうと思われる大岩壁が現れた。ここで、正会員が口々に、「新客はあの岩壁の上から半身を出して壁下を覗く」修行をしなければならないと云う。

荒修行の初めが、この「西の覗」の修行である。ここで、「木綿のさらし布を持参すること」の意味が分かった。これを「たすき掛け」にして、背中の結び目を持ってもらうのである。この時、自分の手はしっかりと組んで離さないようにしないとすっぽ抜けるとのこと。足も片足ずつ熟練の修験者に持ってもらう、胸辺りまで岩からのり出すのだが、「出し方が足りない」と叱られ、その後「〇〇を守るか」、「△△を大事にするか」など5～6つを詰問され、その都度、返事が悪いとさらに突き出されるという恐ろしい修行だった。内心、「落とされることはない」と思い、眼を開けて下を見ると、丁度、機上から見下ろす感じであった。この後、山上龍泉寺で法樂を行った。

朝食後、山先達による「裏行場修業」になった。こちらは、絶壁に登り、あるいは岩の間をくぐり、最後に、片側が数十メートルはある絶壁の頂上部分を時計回りに3/4回転するという修行である。最後の段階の前で、「この先はやらなくて、迂回路を通ってもよい。しかし、途中でやめることはできないから、ここで決断せよ」と言われたが、ここまで来て、今更やめるわけにもいかない。新人は顔を見合わせたが、やめる者はなく、4人（70歳代3人、50歳代1人）とも修行となった。岩の頂上部分の突起を両手でしっかりと保持しながら、ま



山頂を行く山伏一行



裏行場修業（3点支持の絶壁登り）

ず、数センチ程しか出ていないような岩の小さな突起に左足をかけ、次にその先のこれも小さな突起に、右足を左足と岩の間を抜くようにしてかけ、岩に抱きつく様な姿勢にして、最後は左足を大きく回して台上に載せるという回り方である。この場合は、岩をしっかり持った自分の腕しか頼るところがない状態で、写真を撮る余裕はもちろん眼下を見る余裕もなく、あとから思えばこちらの方が恐ろしい修行であった。

以上で、無事にわれわれ新客の修行も済み、大峯山寺で法楽、役行者神変大菩薩参拝を済ませた。8時ごろに下山を始め、来た道を大橋茶屋まで戻り、遥拝所法楽、京都入峰会石碑参拝の後、宿の迎えの車で麓の龍泉寺に向かい、法楽後、11時ごろ旅館に戻った。汗を流した後は、禁酒が解かれ、肉や魚も付いた昼食に舌鼓を打った。食後、7月に吉野から熊野まで3泊4日で奥駆けがあるがどうかと誘われた。魅力を感じたが、私の体力では5泊6日は必要と断った。

山登りのつもりが、思いがけず大峯山龍泉寺の山伏修行を経験することになった。俄か修行でどれほど功德になったか、恐らくはないであろう。しかし、妙にすっきりとした気持ちになったのは確かである。

（藤田保健衛生大学 客員教授）